

尚醸会会報

第10号



《生命先端工学専攻 C3 棟（サントリー記念館）と生物工学棟正面玄関》

大阪大学工学部
醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会
尚醸会
平成19年9月

同窓会開催のご案内

- 開催日 平成19年11月9日（金）
場所 大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻
C3棟（サントリー記念館）5階メモリアルホール
- 15:00 新棟見学 生物工学棟（C2、C3棟）正面玄関 集合
○16:00 生物工学棟・サントリー記念館改修記念式典
* 経過説明（コース長）
* 研究科長挨拶
* 祝辞（サントリー株式会社）
* 祝辞（同窓会会長）
- 16:30 総会
○17:00 講演会
講演者 吉田敏臣 昭和38年卒業
「バイオテクノロジー分野における東南アジアとの国際交流」
鈴木市郎 平成3年卒業
「Professional Science Masters；米国におけるビジネスを志向した理数系大学院教育」
- 18:00 懇親会 レストラン ラ・シェーナ 会費 7,000円
大阪大学吹田キャンパス内 GSE コモンイースト棟 15F
電話 06-6816-8411
- 出欠を同封の用紙にて Fax、郵送または、E-mail でお知らせください。

本年度の同窓会はリニューアルされた母校で

平成17年度秋の同窓会では、改修前の建物を見納めていただきました。その後、昨年末からの改修工事が完成し、建物全体が大幅にリニューアルされました。昔の面影を胸に、美しくかつ機能的になった母校を是非見に来て下さい。

幹事長 卜部 格

☆ 目次

- ・教室・学会・同窓会・・・・・・・・・・・・・・・・大嶋 泰治 1
- ・生物工学棟の改修整備が完成しました・・・・・・・・卜部 格 5
- ・バイオテクノロジー分野における
東南アジアとの国際交流・・・・・・・・吉田 敏臣 7
- ・Professional Science Masters；
米国におけるビジネスを志向した理数系大学院教育・・鈴木 市郎 9
- ・2007バイオテクノロジーセミナー東京開催報告・・三輪 治文 11
- ・同窓会通信 13
- ・平成18年度同窓会会計報告 15
- ・同窓会会則 16
- ・会員動向 18
- ・教室の構成 20

教室・学会・同窓会

大阪大学尚醸会会長 大阪大学名誉教授
大嶋泰治（昭和 30 年卒）

本同窓会会長の芝崎 勲 先生には、かねてよりご高齢の故をもって会長の任を辞したいとのご意向をお漏らしになっていました。この件、幹事の先生方とも慎重に審議いたしまして、やむなく副会長の任にありました不肖の私が後任をお引き受けすることになり、昨年秋の同窓会の席上において会員の皆様のご賛同をいただき、まことに光栄に思う次第でございます。もとより非才の身ではありますが、幹事役の先生方のご協力を得て、楽しく有意義な同窓会の運営に微力を尽くしたいと考えています。会員皆様のご協力とご支援のほど心よりお願い致します。

さて、いづこも同じかも知れませんが、私共の同窓会にも過去に様々な経緯がありました。幸いにその克明な記録である「百年誌 大阪大学工学部 醸造・醱酵・応用生物工学科」が、芝崎先生ご所持の資料を基に編纂され、また関連する記述が「日本生物工学会 80 年史」と土田盛一氏の「謝恩誌」にもあります。会長就任にあたり、これらの資料を読み返し、この歴史と経緯を知ることは、今日の同窓会の運営に大切と考え、皆様にもご承知いただきたく、私歴と私見を含めて以下に短く要約してみました。ご披見いただければ幸いです。

本同窓会の歴史は、**大阪高等工業学校醸造科**を明治 35 年（1902）7 月に卒業した 5 名の卒業生にまで遡ることができる。同校の基は明治 29 年（1896）に創立された修学年限 4 年の**大阪工業学校**であり、そこには当初より醸造科が設けられていたが、明治 33・34 年度には卒業該当者がなく、上記の 5 名が本会最初の同窓生である。以来、大阪工業学校は大阪高等工業学校への組織変え（1901）を経て、修業年限 3 年の**大阪工業大学**（1929-）、**大阪帝国大学工学部醸造学科**（1933-）から戦後の**大阪大学工学部醱酵工学科**（1947-）へと変遷した。この大阪工業学校の当初より醸造科が設置されたについては、当時の産業界で重要な地位を占めていた醸造界と、大阪府の働きかけが大いに貢献した。しかし、工業大学への昇格の過程では、その存続さえもがいささか問題とされた。それを突破して今日に至ったのは、当時の教室員を超える卒業生の熱意と努力の賜物であった。しかし、学生定員はほぼ半減され、教員構成もほとんど変えられて実質 2 講座の編成が 1949 年の新制大阪大学まで続いた。その間に**醸造科**から**醸造学科**（1929 年の工業大学昇格時）へ、さらに**醱酵工学科**への改称（1943）があり、大戦後の昭和 25 年（1950）に至って 3 講座編成となった。

私が入学した頃（1951）の教室はこの状態にあり、教養部は豊中キャンパスで、専門課程の初期は枚方中宮キャンパスで、三年次の学生実験が始まったところから

工学部本拠の東野田キャンパスで過した。そこで博士までの課程を学び、昭和 35 年（1960）の春に教室第一号の新制度の工学博士号を頂いたのは中之島本部キャンパスの講堂であったように記憶している。私はその後、サントリー社に就職して大阪市堂島にあった研究所に勤めた。その頃の約 10 年間の我が国は高度成長期の最中にあり、それを背景に行われた大阪大学の吹田キャンパスへの移転（1968）と同時期に、この醱酵工学科の改組拡充が認められ（1967）、講座内容の改訂と共に逐次に拡充されて 6 講座編成となった。私がサントリー社研究所から助教授として大学に復帰したのは、千里丘陵で万国博覧会が賑やかに開催されていた昭和 45 年（1970）6 月中旬であった。その後、第四講座担当の教授（1972）を拝命し、平成 3 年（1991）には、教室職員はもちろん大学・学部のご協力の下で、8 講座編成の**応用生物工学科**への改組拡充を成し遂げることができたのは望外の幸運であった。その一方で、田口久治教授のご努力により、**工学部附属微生物学国際交流センター**（時限施設）が昭和 53 年（1978）に設置され、醱酵工学科との密接な連携の下で、主として東南アジアを舞台として活躍していた。これが昭和 60 年（1985）の**工学部附属生物工学国際交流センター**（時限施設）への衣替えを経て、昭和 62 年春に停年退官した田口教授に代わり、新任の吉田敏臣教授のご協力を得て、平成 7 年（1995）に本交流センターを永続的な大学付属の**生物工学国際交流センター**に改組した。なおこの間の平成 6 年（1994）6 月には、新設の大阪大学留学生センターにおいて初代センター長を仰せつかり、平成 7 年 1 月の阪神大震災の中で、同センターの設置と運営にかかわりながら、平成 8 年（1996）の停年退官を迎えた。

このように変遷を重ねた学科において、大阪高等工業学校時代に坪井仙太郎教授の主導の下に、在学生と卒業生を正会員また特別会員とし、知識の交換と親睦を図ることを目的として、明治 43 年（1910）に**大阪高等工業学校醸造会**が組織され、年 2 回の**醸造会誌**の刊行が始められた。この素地の下に、大正 12 年（1923）には、当時の醸造会会長の西脇安吉教授は、卒業生を中心とした組織の**大阪醸造学会**を設立され、月刊の学術誌としての**醸造学雑誌**の発刊を始められた。これが教室の醱酵工学科への改称（1943）に連動して**醱酵工学雑誌**（1944）となり、今日の**生物工学会誌**に続いている。

その後、この大阪醸造学会は大戦中にも学会誌を休刊することなく、醸造学から発酵工学へと発展する応用微生物学一般と食糧工学含む分野に順調な発展を遂げてきた。しかし大戦の惨禍から復興し、工業の発展と学術研究が隆盛に向う中であって、教職員と卒業生を正会員とし、また在学生を通常会員とし、他大学その他の出身者を特別会員とする大阪醸造学会は、大きな矛盾を露呈するに至った。すなわち、卒業はしたが学術には直接関係しなくなった多数の正会員たるべき卒業生を数える一方で、会の運営に対して発言権のない特別会員の活力が、学会活

動に無視できない現実を見るに至ったのである。すなわち、これまでの大阪高等工業学校醸造会はもちろん、大阪醸造学会も同窓会的な色彩の濃厚な団体であった。この組織に学理の究明と工学的応用に興味を集中して参加した他学出身の構成員を多数抱えるに至り、いわゆる社会学者のいうゲマインシャフト (Gemeinschaft) とゲゼルシャフト (Gesellschaft) が同一組織に混在する状態となっていたのである。こうして大阪醸造学会では、当時の学会主導者であった齋藤賢道先生 (当時は名誉教授) と、その任を引き継いだ照井堯造教授を中心に組織の見直し論が交わされ、大阪醸造学会設立以来 40 年を経た昭和 37 年 (1962) に、大改革を断行するのやむなきに至ったのである。その結果、学会を担う主たる会員を通常会員と学生会員とし、その出身に関わらず、それぞれ所定の会費を納める個人と学生とされた。それと同時に学会名も **日本醗酵工学会** と改称された。すなわち大阪醸造学会はゲゼルシャフトとしての立場をとり、ゲマインシャフトの同窓会的要素を切り捨てたのである。

その後の日本醗酵工学会は、ご存知の如く昭和 46 年 (1971) には社団法人の組織となり、平成 4 年 (1992) の **社団法人 日本生物工学会** への改称に伴い、翌年度よりは会誌名を **生物工学会誌** とした。それ以前 (1973) より刊行されていた *Journal of Fermentation Technology* [和文の醗酵工学雑誌とは独立に英文論文のみを収録] についても、その内容をより正しく反映するために *Journal of Fermentation and Bioengineering* と改称し (1989)、さらに学会の国際化と共に、平成 11 年 (1999) にはその英文学会名を **Society for Bioscience and Bioengineering** とし、英文会誌名も連動して *Journal of Bioscience and Bioengineering* に改められて今日に至っている。これらの経過を見るにつけ、大阪醸造学会の学会としての半身が順調な発展を遂げてきたことが理解されよう。

さて、前置きが長くなったが、大阪醸造学会の同窓会としての半身はどのようなその後の経緯を辿ったであろうか。昭和 37 年の大改革を行った照井教授は、これまで醸造会・醸造学会を支えてきた同窓生の心情を汲まれて、それまでの学会専務理事であった土田盛一氏に、その後の同窓会の運営を託された。土田氏は、百年史に縷々記述されているように、さまざまな試みと努力を重ねられ、昭和 41 年には数回の世話人会を催され、同窓会会則の設定と理事の人選に努められた。しかし論議は結論に至らず、遂に一切を醗酵工学科教室にまかされた。教室では芝崎 勲教授をはじめ主だった教員の話し合いの結果、芝崎教授主導の下で、同窓会は存続しているとの基本的考えの下に、会則と理事を決めることなく、また年会費の徴集を行うこともなく、教室の世話で同窓会名簿の発行と機を見て会合を開催するとされた。この体制で、教室の吹田キャンパスへの移転 (1968) に際しての東野田キャンパスへのお別れ会と新学舎落成披露の会、各教授の退官記念祝賀会、会員の叙位叙勲祝賀会、各地方支部同窓生の集まり、また各種学会・研究

会に随伴しての会合が、同窓会の名を付して不定期に行われてきた。

この状態の中で、平成 8 年 (1996) の母校創設百周年に際して、その記念事業の一環として、平成 8 年 11 月 15 日に大阪大学コンベンションホールにおいて、当時の金森順次郎 大阪大学総長、鈴木 胖 工学部長、室岡義勝 応用生物工学専攻長、児玉 徹 日本生物工学会会長その他多くの来賓を迎えて、同窓会の総会 (出席者約 160 名) を催す幸運に恵まれた。そこでの重要な決定事項としては、平成 10 年 9 月発行の同窓会報 第 1 号に掲載された会則に示されているように、会名を「大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科同窓会」とし、初代会長に芝崎 勲 名誉教授を推戴し、運営の実務に当たる幹事長・常任幹事その他を任命したことである。特に幹事長には、不文律として本学出身の長老教授にお願いすることとした。これは同窓会を単なる懇親の場とするのみでなく、斯学とそれに関連する業界の動向についての講演会を催し、もって会員の啓発と啓蒙の場とすべきと考えたからである。それには適切な演者の選定が必要であり、しかも演者としては同窓生と教室関係者が望ましく、その人選を行うには、幹事役として同窓の現役教授とそれを補佐する若手教員の存在が最も重要と考えた。平成 10 年以来、この方式で毎年 11 月の吉日を選んで同窓会が開催されてきた。

なお、これまでに会名として「醸造・醗酵云々」はあまりにも長々しく、しかも発展を続ける教室では、所属する講座が他の教室にまで枝を伸ばす傾向にあり、その名称を会名に取り込むのでは収拾し難く、同窓会の性格を表現する簡潔な名称が求められていた。そこで、幹事の方々とも相談の上で、昨平成 18 年 11 月に開催された同窓会の席上において、会名として「尚醸会」を提案した。これは、我々はバイオテクノロジーを推進することに努力しているが、そのルーツは応用微生物学にあることを表現したいと考えたことに由来する。会員各位のご理解を頂ければ幸いである。

生物学棟の改修整備が完成しました

生命先端工学専攻生物学コース長 卜部 格（昭和42年卒）

平成17年度より始まった大阪大学研究棟改修施設整備事業の第Ⅲ期工事として、生物学棟が改修整備され、新しい環境での研究、教育が8月にスタートしました。工学研究科の改修整備計画は、最初平成14年度に立案されました。応用生物学専攻としても12月に改修WGを作り、具体案の作成を開始しました。そして、翌年1月には、改修設計図の原案を建築の木多道宏助教授に作っていただきました。当初は平成15年度着工希望でしたが、結局、PFI事業による改修計画として再スタートすることになりました。平成16年9月に改修・整備事業の要求水準書が提示され、平成17年2月に落札者（清水建設を代表企業とするグループ）が決定し、ようやく工学研究科の改修整備計画が現実のものとなりました。

生物学棟は、工学研究科の建物記号ではC2とC3の2棟で構成されています。このC3棟は、サントリー（株）創業70周年記念事業の一環として大阪大学に寄贈され、昭和45年9月に竣工したサントリー記念館です。この度、本記念館の改修整備にあたり、サントリー（株）よりご寄附をいただきました。そのご厚意に深く感謝申し上げます。

平成19年8月現在、生命先端工学専攻生物学講座には兼任を除いて、教授7名、准教授（旧称 助教授）4名、講師1名、助教（旧称 助手）7名の教員がおります。学部の応用生物学コースおよび大学院の生物学コースの教育は、これら生物学講座の教員に加えて、物質生命工学講座の極限生命工学領域の3名の先生方、生物学国際交流センターの4名の先生方、情報科学研究科バイオ情報工学専攻の5名の先生方、および産業科学研究所高次細胞機能研究部門の4名の先生方が協力して実施しています。この他、生物学講座とその関連講座には、特任教員3名、技術職員・事務職員5名、事務補佐員21名、加えて多くのポストドク研究員や非常勤職員の方々が働いております。一方学生は、英語コース所属の大学院生も含めると、博士後期課程に58名、博士前期課程に126名の大学院生が所属しており、学部4年生は70名在籍しています。

さて、生物学講座および関連講座におきましては、この一年の内にいくつかの人事異動がございました。平成19年1月に進化生命システム学領域の松浦友亮助手が生物共生情報工学講座の特任助教授に昇任されました。3月末には生物学国際交流センター長の関達治教授が定年退職され、4月からタイの大阪大学海外拠点であるバンコク教育研究センターのセンター長に就任されました。4月には細胞工学領域の福崎英一郎助教授が生物資源工学領域の教授に昇任されまし

た。また、代謝情報工学講座の永久圭介助手が三菱ガス化学（株）に転出され、同講座に平沢敬 助教授が着任されました。なお、4月から「助手」が「助教」、「助教授」が「准教授」に変わりました。また、バイオ情報工学専攻の「生物共生情報工学講座」が「共生ネットワークデザイン学講座」に名称変更しました。5月には共生ネットワークデザイン学講座の柏木明子助教授が弘前大学農学生命科学部准教授に栄転されました。6月には生物学国際交流センターの川崎（中川）浩子助教授が製品評価技術基盤機構バイオテクノロジー本部生物遺伝資源保存部門に転出され、8月には共生ネットワークデザイン学講座に鈴木宏明准教授が着任されました。

今後とも生物学講座とその関連講座の発展のため、同窓の諸先輩方のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

バイオテクノロジー分野における東南アジアとの国際交流

大阪府環境農林水産総合研究所 所長
吉田敏臣（昭和 38 年卒）

アジア地域におけるバイオテクノロジーの展開は、1980 年代にはじまり、世界と比べると全般的に未発達であり、その特徴としては、生物資源が豊富だが技術が未熟、アグロテクノロジー志向、資金と人材が不十分、公的機関支配で民間参加がまだまだであるといえる。バイオベンチャーが発達しているのは香港、韓国、台湾、シンガポールである。日本は中国、マレーシアなど東南アジア諸国とともにこれらの国に遅れをとっている。東南アジアではシンガポールに加えて、タイ、マレーシア、三国が新興勢力として注目されている。マレーシアでは、2,000 エーカーの BioValley Malaysia が開発され、National Institute for Agro-Biotechnology、National Institute for Pharmaceutical and Neutraceutical Bio-technology、National Institute for Genomics and Molecular Biology. が創設されている。シンガポールの Tuas Biomedical Park では、心臓三次元モデル、細胞代謝モデル、神経情報伝達モデルの開発など、メディカル分野のバイオテクノロジーが中心である。タイにおけるバイオテクノロジー開発のゴールは、新規バイオビジネスの創成と発展、「世界の台所」、「アジアの医療センター」、環境保全とクリーンエネルギー生産、国王の勧める「足を知る経済」推進などがあげられている。タイの国家プロジェクトとしてエビプロジェクトがあり、国立研究所の BIOTEC が支援するクラスターが展開されている。そのほか、インドネシアでは、日本の(独)製品評価技術基盤機構と連携して、微生物資源の開発と利用を強力に推進しているのが注目される。いずれにしろ東南アジア諸国では、バイオテクノロジーがそれぞれ国家プロジェクトの中に最重点項目として取り上げられているが、GMO の導入については、おおむね抑制的である。

我が国の東南アジア諸国との科学技術協力は、対象国が開発途上国 (developing country) から先進国 (developed country) と発展するにつれて、援助・支援から協同へと展開してくる。たとえば、これまでの大阪大学生物工学国際交流センターの「ユネスコ微生物学国際大学院研修講座」(1973-2003) は、援助的事業であったが、タイ国との共同事業に発展した「ユネスコバイオテクノロジー国際大学院研修講座」(2004-) は、援助的あるいは支援的要素に加えて協同的要素を含む事業となっている。これは、日本学術振興会の拠点大学方式による工業微生物・バイオテクノロジー分野の学術交流事業において、タイ、シンガポール、フィリピンとの 2 国間事業において援助から支援的であったものから、バイオテクノロジー分野でタイ、フィリピン、インドネシア、マレーシアとの多国間事業となるとともに協同的要素が漸増してきたこととほぼ軌を一にしているといえる。

そして、生物学国際交流センターは、科学技術振興調整費の事業において、国内有力大学の参加を得て、上記諸国にベトナム、カンボジア、ミャンマーを加えた東南アジア諸国との協力によって、「熱帯生物資源とグリーンケミストリー戦略」なる課題で国際共同研究を行った。その結果、我が国の日本生物工学会、韓国の KSBB (Korean Society for Biotechnology & Bioengineering)、そして東南アジア諸国の関連学協会の参加を得て、SMBnet (The Network of the Societies for Microbiology and Biotechnology) in Southeast Asia なる学協会連合組織が創設されて。さらに生物学国際交流センターは、東南アジアにおけるバイオテクノロジーの共同研究の拠点として、タイ国マヒドン大学理学部と協力して、CRS (Cooperative Research Station in Southeast Asia) を 2002 年に開設した。

大阪大学工学研究科応用生物学専攻は、修士・博士課程一貫の英語コースとして、2002 年にバイオテクノロジー国際大学院プログラムを創設し、現在 International Program of Frontier Biotechnology として、毎年 10 名の国費奨学生を受け入れている。

東南アジア諸国とのバイオテクノロジー分野における国際的学術交流の発展は、文科省のアジア科学技術協力推進戦略事業の中で採択された東南アジアのバイオ資源を対象とするバイオ生産研究センター構想に実を結んだ。この事業は、文科省の補助資金に対応する額の資金がタイ国の NRCT (National Research Council of Thailand) と NSTDA (National Science and Technology Development Agency) から拠出され、基本的に同等資金拠出の協同事業となってきた。この事業では、日本側で大阪大学を拠点校として、北海道大学、東京大学、九州大学、富山薬科大学などの参加を得たコンソーシアムが形成され、タイ国では、NRCT の支援を受けるマヒドン大学、カセサート大学、キングモンクット工科大学トンブリ校ならびに NSTDA 管轄下の BIOTEC 研究所でコンソーシアムを形成している。

**Professional Science Masters ;
米国におけるビジネスを志向した理数系大学院教育
横浜国立大学大学院工学府
鈴木市郎（平成3年卒）**

最近、企業が理系の大学院修了生に求める資質と大学院の教育との間にずれが生じている、とよく言われます。「イノベーション」を標榜する社会では、高度な専門知識を有する人材が様々な場所で必要とされています。21世紀のイノベーションは、単一の技術革新ではなく様々な分野の融合から生まれるといわれています。そこで産業界はイノベーションを担うべき大学院修了生に、高度な専門分野の知識だけでなく、法律や経営学などの広範な知識、異分野の人とのコミュニケーション能力やマネジメント力などを有することを求めています。しかし、国内のほとんどの理系大学院の教育では、このような専門的知識以外の能力は授業のような系統的な形でトレーニングされておらず、専ら研究室の各教官の指導力や学生個人の努力に任されているのが現状です。

米国では最近、「理数系における MBA」と呼ばれる新しい学位、Professional Science Masters (PSM)が注目されています。この PSM では理数系大学院のカリキュラムの一部としてマーケティング・マネジメント・知的財産管理などのビジネス関連の科目を受講し、産業界で役立つ知識を得ることができます。横浜国大大学院では今年度より、この PSM などを参考にした新しい工学系大学院教育 (PED コース) を開設しました。本日はこの PSM が生まれた背景、歴史、内容などを紹介します。

米国 Council on Competitiveness が 2004 年 12 月に発表した「INNOVATE AMERICA レポート」(通称「パルミサーノ・レポート」)では、イノベーションを 21 世紀における米国の成功を決定する最も重要な因子と位置づけ、将来のイノベーションを担うべき自然科学・工学を学ぶ学生への支援が提言されています。近年、全米の学士取得者における自然科学・工学系の割合はアジアや EU 諸国よりもかなり低く、将来米国の理数系技術者はアジア人で占められてしまうだろうとも言われています。企業で研究職に就くには大学院レベルの高度な専門知識が必要であるにもかかわらず、これら理数系の学生の大学院進学率は高くありません。原因として、Ph. D. の取得にかかる時間とコストや、修士の学問的学位 Master of Science (M. S.) の理数系におけるネガティブなイメージ、などの問題が挙げられています。

一方、1980 年代より米国では、MBA など社会人を対象とした職業学位 professional degrees の人気が高まっていました。そこで 1997 年、Ph. D. よりも容易に取得でき、高度な専門知識を要する職業につくことができる「理数系にお

ける MBA」の確立を目指し、A. Sloan 財団らの主導で産業界を目指す理数系学生のための新しい職業学位、PSM が提案され、支援が開始されました。

PSM 実施の支援を受けるには、理数系大学院の専門教育に加えビジネス、法律等の実務分野などの授業科目を用意する／インターンシップを積極的に活用し、学生に企業との密接な係わりを持たせる／大学近隣の企業による Industrial Advisory Board (IAB)を設置し、ビジネス科目等の選定やインターンシップへの協力を得る／などの項目を整備する必要があります。バイオインフォマティクスや環境リスクマネジメントなど複数の科学分野を融合したプログラムや、金融数学など自然科学と経営、法律など実務分野とを統合させたプログラムなど、現在 54 大学で 112 の PSM プログラムが実施されています。

PSM で行われるビジネス分野の教育は MBA 等で提供されている授業を利用し、テクニカルコミュニケーション、プロジェクト管理、知的財産管理などが学習できます。一方、研究室配属や修士論文は必ずしも必要とされず、代わりに長期インターンシップなどが行われるなど、研究室に必ずしも所属しないままに学位が取得できる仕組みとなっています。2002 年に最初の修了者が出て以来、2005 年 12 月の時点で 1,300 名以上が PSM に在籍し、500 名以上の修了者を輩出しており、PSM は米国の理数系大学院教育に着実に浸透しつつあります。

2007バイオテクノロジーセミナー東京開催報告

尚醸会関東支部幹事
三輪治文（昭和47年卒）

昨年に引き続き本年も5月25日学士会館に於いてバイオテクノロジーセミナー2007が開催されました。多少小雨交じりの悪天候にもかかわらず、昭和30年代卒業のベテランから平成卒業の若手まで総勢53名という昨年を上回る参加者を得て、盛大かつ和やかに開催する事が出来ました。

前半は、ト部格教授（昭和42年卒業）による最近の阪大及び生物工学の動向紹介と元特許庁審判官廣田雅紀先生（昭和44年卒業）による「バイオ産業における知財戦略」と題する講演が行われました。参加者の中には長く阪大工学部を訪れていない人も多く、吹田学舎の変貌や進められている研究内容の発展振りに驚きと興味を抱かれた様子でした。また廣田先生の具体例を随所に取り入れたバイオ技術や医薬分野における特許に関するお話には皆さん関心が高かったと見え、熱心に聞き入っておられました。



ト部教授の大学紹介



講演中の廣田先生

後半は、学士会館レストラン部の美味しい料理に舌つづみを打ちながらお酒が大いに進む懇親会となりました。折から出張で上京中の原島俊教授や各年代の皆さんから近況報告や自己PR等を話して頂きました。皆さんのお話を伺う中で、発酵（生物）工学出身者も色々な分野で活躍し、また個人で事務所等を開きコンサルタント業等に転身して活躍中の皆さんも何人かおられる事に改めて感心させられました。宴会場の終了予定時刻を瞬く間に迎え、みなさん名残惜しさの中散会となりました。



講演会後の懇親会

本企画は、阪大発酵の同窓会を兼ねた年一回の定例行事として今後も企画していく予定です。昨年、あるいは今年参加された方はもちろん、まだ参加されていない方も来年のセミナーには是非参加して頂きますようご案内する次第です。

<<同窓会通信>>

● クラス会活動の報告

個人情報が含まれるため web 版では詳細は省略致しました

● 同窓生からのメッセージ（平成 18 年 順不同）

個人情報が含まれるため web 版では詳細は省略致しました

☆平成 18 年度 同窓会会計報告

web 版では詳細は省略致しました

大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学同窓会「尚醸会」会則

- (名称)
本会は大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学同窓会「尚醸会」と称する。
- (会員の構成)
本会は次の会員で構成する。
 - 正会員
イ 大阪大学応用自然科学科応用生物工学コース、同大学大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コース（以下教室と言う）およびそれらの前身学科、専攻の出身者。
ロ 上記イの教室および付則に示す関連講座の旧教官・教員、現教員および現職員。
ハ 上記イの教室および付則に示す関連講座に関係のあるもの（旧職員、研究生、実習生など）で、入会を希望し会長が承認したもの。
 - 名誉会員
会員の中から幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。
 - 賛助会員
本会の趣旨の賛同し、付則に定める会費を納めるもので幹事会の推薦により総会の承認を得たもの。
 - 学生会員
大阪大学工学部応用自然科学科応用生物工学コースおよび同大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コースに所属する学生。
- (目的)
本会は会員相互の親睦を図り教室の発展に寄与することを目的とする。
- (所在地)
本会の事務所は教室内に置き、会員の希望により支部を設けることができる。
- (役員)
本会には次の役員を置く。
 - 会長 1名 正会員の中から総会で選出する。
 - 副会長 2名 正会員の中から会長が推薦し、総会で承認する。
 - 幹事長 1名 正会員の中から会長が委嘱する。
 - 幹事 若干名 正会員の中から会長が委嘱する。
 - 監査 2名 正会員の中から総会で選出する。

- (役員の仕事)
本会役員は、役員会を構成し、本会の運営を図る。役員の仕事は次のとおりである。
 - 会長は本会を総理する。
 - 副会長は会長を補佐する。
 - 幹事長は幹事を総括して会務を掌理する。
 - 幹事は庶務、財務、企画、編集の事務を行う。
 - 監査は本会の運営と会計を監査し、総会に報告する。
- (役員の任期)
役員の仕事は 2 年とし再任を妨げない。
- (名誉会長)
 - 本会に、名誉会長をおくことができる。
 - 名誉会長は幹事会が推薦し、総会の承認を得て委嘱する。
- (会議)
 - 本会は原則として 2 年に 1 回総会を開き、役員の仕事の改選、会計報告、会則の改正、その他重要な事項を議する。
 - 総会の議決には出席正会員の過半数の賛成を必要とする。
- (会計)
 - 本会運営の経費は会費およびその他の収入を持ってあてる。
 - 会費は付則に定める金額とする。
 - 名誉会員および学生会員からは徴収しない。また、卒業後 50 年以上の会員は会費を免除する。
 - 本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日に終わる。
- (会則の変更)
本会の会則は総会において出席正会員の三分の二以上の賛成を得て改正することができる。ただし、書面を持って賛否を表す場合は出席とみなす。

付則

- 大阪大学応用自然科学科応用生物工学コース・同大学大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コースの関連講座とは、大阪大学生物工学国際交流センター、同大学工学研究科物質・生命工学専攻極限生命工学講座、同大学産業科学研究所生体応答科学研究部門高次細胞機能部門、同大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻代謝情報工学講座、同大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻生物共生情報工学講座およびその前身をさす。
- 本則第 9 条の会費は次のとおりとする。
会費 正会員は年額 2,000 円、賛助会員は年額 1 口 5,000 円。
- 本則第 4 条の規定に従い、本会に関東支部を置く。
- 付則の変更は役員会の議をもって行う。
- 本会則は平成 8 年 1 月 15 日から施行する。

平成 18 年 11 月 11 日改訂

☆同窓会現組織

会長	大嶋泰治
副会長	菅 健一、中桐義隆
幹事長	卜部 格
幹事	原島 俊（庶務担当）、片倉啓雄（庶務担当）、藤山和仁（編集担当）、大政健史（名簿担当）、四方哲也（財務担当）、松浦友亮（庶務担当）、古賀雄一（編集担当）※
監査	永井史郎、柴谷武爾

※ 永久圭介幹事の転出に伴い、古賀雄一が編集担当幹事に就任

☆会員の動向

（最近の動向がございましたなら、同窓会までご一報下さい。）

● 職員の異動

個人情報が含まれるため web 版では詳細は省略致しました

● 会員訃報 心からのご冥福をお祈り申し上げます。

個人情報が含まれるため web 版では詳細は省略致しました

● 平成19年3月卒業、修了生進路等 （工学研究科教務掛提出資料より）

個人情報が含まれるためweb版では詳細は省略致しました

学部卒業

大阪大大学院工学研究科博士前期課程生命先端工学専攻進学

46名

大阪大大学院情報科学研究科博士前期課程バイオ情報工学専攻進学

7名

大阪大学大学院生命機能研究科進学

3名

就職、他大学進学、その他

ツェンハーゲンジャパン、ビジネスエンジニアリングへ移行、東京大学大学院新領域創成科学研究科、東京大学へ編入予定

大学院前期課程修了

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程生命先端工学専攻進学

2名

就職、他研究科進学、その他

ブリジストン、住友ゴム、ヤマサ醤油、アサヒビール、三井物産ソルベントコーティング、東洋新薬、小川香料、森永乳業、白鹿・辰馬本家酒造、小野薬品工業 2名、タマノ井酢、島津

製作所、大阪大学非常勤職員、P&G、アヲハタ、武田薬品工業 2名、サントリー、味の素、キリンビール 3名、海外渡航後就職予定、カゴメ、日本食品分析センター、電気化学工業、住友重機械工業、自営業、第一アスピロフォーム

大学院後期課程修了

韓国、大阪大学非常勤職員、インドネシア、三菱化学、(財)地球環境産業技術研究機構、シンガポール、社会人ドクター、国立遺伝学研究所、社会人ドクター：月島機械、東レ、タイ 2名

同窓会からのお願い

近年、企業合併や部署移動、市町村合併によって住所変更、所属変更となる方が増えております。自宅住所、勤務先住所等に変更のある場合には同窓会までぜひご連絡いただけましたら幸いです。お寄せ頂いた個人情報は同窓会誌発送以外には利用いたしません。

☆教室の構成

web 版では詳細は省略致しました

★クラス会幹事（クラス会幹事の方には会員の所属の移動等について同窓会への連絡をお願いいたします）

昭和 12 年		昭和 39 年	藤田正憲	昭和 61 年	大政健史
昭和 15 年	石井隆一郎	昭和 40 年	新名惇彦	昭和 62 年	山本恵三
昭和 16 年	武田六郎	昭和 41 年	関 達治	昭和 63 年	向 由起夫
昭和 18 年	芝崎 勲	昭和 42 年	卜部 格	平成元年	永尾寿浩
昭和 19 年	松本 博	昭和 43 年	関口順一	平成 2 年	松本雄大
昭和 21 年		昭和 44 年	土戸哲明	平成 3 年	鈴木市郎
昭和 23 年	佐藤 勝	昭和 45 年	古川憲治	平成 4 年	内山圭司
昭和 24 年	野口祐一	昭和 46 年	山本忠行	平成 5 年	滝口 昇
昭和 25 年	足立有	昭和 47 年	島田裕司	平成 6 年	松浦友亮
昭和 26 年	辻坂好夫	昭和 48 年	曾根良昭	平成 7 年	永久圭介
昭和 27 年	松中昭一	昭和 49 年	小西喜朗	平成 8 年	金谷 忠
昭和 28 年(旧制)		昭和 50 年	中塚正博	平成 9 年	小林 肇
昭和 28 年(新制)	高野光男	〃	東浦忠司	平成 10 年	田中礼央
昭和 29 年	嶋谷幸雄	昭和 51 年	溝口晴彦	平成 11 年	永塚由佳
昭和 30 年	大嶋泰治	昭和 52 年	根来誠司	平成 12 年	井戸芳博
昭和 31 年	遠藤靖夫	昭和 53 年	金子嘉信	平成 13 年	後藤優治
昭和 32 年	細見正明	昭和 54 年	高木 睦	平成 14 年	有岡伸悟
昭和 33 年	中桐義隆	昭和 55 年	滝沢 昇	平成 15 年	新家康弘
昭和 34 年	野本哲也	昭和 56 年	阿野貴司	平成 16 年	和田 悠
昭和 35 年	森元英雄	昭和 57 年	片倉啓雄	平成 17 年	藤井健治
昭和 36 年	戸田廣良	昭和 58 年	森川正章	平成 18 年	鳳桐智治
昭和 37 年	菅 健一	昭和 59 年	藤山和仁	平成 19 年	高木康弘
昭和 38 年	吉田敏臣	昭和 60 年	中嶋幹男		

* クラス幹事が空欄の学年は、その学年でご相談の上、同窓会事務局までお知らせください。

会員各位

拝啓、ますますご清祥のことと拝察します。

さて、下記記載の要領で平成 19 年度会費の納入をお願い申し上げます。

記

1) 郵便振替にて納入される場合

同封の払込通知票を用いて、最寄の郵便局にてお振込下さい。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

金額：2、000円

2) 郵便貯金口座自動払込を申し込まれる場合

最寄郵便局で自動払込利用申込書に必要事項を記入の上、お申し込み下さい。今後、毎年11月30日に貴口座より、年会費2、000円を自動引き落としさせていただきます。手続きの都合上10月15日までにお願い申し上げます。

(ご記入内容)

払込先口座番号：00920-5-83256

払込先加入者名：阪大工醸造醗酵応生同窓会

払込開始月：平成19年11月から

払込日：30日

払込の種別：会費

(注：昨年度すでに自動払込申込をされた方は新たな手続きは不要です。)

♪♪♪♪♪ 同窓生のみなさまへ会費免除のお知らせ ♪♪♪♪♪

いつも会費納入にご協力いただきまして誠に有り難う御座います。

同窓生のみなさまは卒業後50年経過しますと会費免除となります。

平成19年度は昭和32年卒の同窓生が該当致します。会誌送付や諸行事への参加などは今までと変わりありません。今年から免除になられた同窓生及びすでに免除になっておられる同窓生の皆様には、長い間会費を納入していただきまして有り難う御座いました。

今後も同窓会へのご支援・ご協力のほど宜しくお願い致します。



大阪大学工学部 醸造・醗酵・応用生物工学科

同窓会会報 第10号

平成19年9月15日 発行

印刷所 中西印刷

発行人 同窓会幹事長 卜部 格(昭和42年卒業)

〒565-0871

吹田市山田丘2-1

ホームページ

<http://www.bio.eng.osaka-u.ac.jp/doso/>

電子メール

doso@bio.eng.osaka-u.ac.jp